

【特別寄稿】

ある図書館の話

放送大学名誉教授 柏倉康夫

活字離れが言われて久しいが、紹介したいのは、私などフランスの 19 世紀、20 世紀の文学を研究する者にとって、参照しなければならない貴重な資料を数多く所蔵している「ジャック・ドゥーセ文学文庫」という図書館である。

パリの中心に位置する 5 区に、フランスの偉人といわれる人たちを祭った「パンテオン」が建っている。その前の広場に面して「サント・ジュヌヴィエーヴ図書館」があるが、「ジャック・ドゥーセ文学文庫」はその分館で、近現代のフランスを代表する文学者たちの直筆の原稿などが集められている文献の宝庫なのである。

ここが「ジャック・ドゥーセ文学文庫」と呼ばれるのは、ジャック・ドゥーセという人物の蒐集が基になっているからだが、ジャック・ドゥーセという名前を聞いたことがあるだろうか。

いまではフランスでも、文学関係者以外はあまり知らない忘れられた名前になってしまったが、かつてはパリの優雅さを象徴していた。服飾デザイナーである彼がつくる高級服や花嫁衣装、刺繍ものは、パリ中の女性たちを魅了したのだった。マルセル・プルーストの小説『失われた時を求めて』の中にも、ヴァンドーム広場にあったドゥーセの店で、新作のドレスを買って自慢しあう女性たちの姿が描かれている。

時代の新しい美に敏感だったドゥーセは、印象派の画家たちが活躍するようになった 1850 年代以後、世間にさきがけて、印象派の画家たちが達成しようとした色と光の画面づくりを、衣服の制作に生かそうとした。多彩で、しかも透ける生地を何枚も重ねることで、絵と同じような効果を得ることができると考えたのである。こうして、ドゥーセ以外には誰もつくらなかった独特の服が登場し、世間の喝采を博した。

ただ名声をほしいままにした彼は、服飾デザイナーであることにひけ目を感じていたといわれる。若いときから絵を描いていたドゥーセの本来の望みは画家になることで、成功をおさめた後も、デザイナーであるよりも芸術の愛好家でありたいと願っていた。こうした強い思いが、彼を希代のコレクションへと駆り立てた。まずはフラゴナール、ワトーなど 18 世紀を代表する画家の作品を蒐集し、その後はそれらを競売にかけ、次には同時代の画家たちの作品を集めたのである。

ドゥーセは美術の蒐集とならんで、文学作品や肉筆原稿の蒐集を思い立った。これには信頼を寄せていた作家アンドレ・シュアレスの助言があり、次第に象徴派以降の詩人や作

家の原稿や初版本を集めるようになった。

シュアレスは 1916 年 6 月、ドゥーセに宛てた手紙で、「19 世紀末以後、文学と音楽は新しい道を発見しました。これを蒐集することで、あなたの書斎はかつての 18 世紀の画家のコレクションと同じように、人間の讃歌となるのです」と述べて、フローベールとボードレーの初版本、ヴェルレーヌ、マラルメ、ランボーの原稿など、今後蒐集すべき自筆原稿や本や雑誌を列記している。

シュアレスと並んでアンドレ・ブルトンも、一時ドゥーセの許で図書係をつとめ、近代絵画や彫刻の選択のアドバイスをした。ブルトンはシュルレアリスム運動を始めた文学者で、一時期ドゥーセに助言して、その代価として支払われる金で生活していた。そして彼のアドバイスにより、アンリ・ルソーの《蛇使い》やピカソの《アヴィニヨンの娘たち》などの重要な作品が、ドゥーセの許にもたらされた。

ブルトンはさらに、「ジャック・ドゥーセ文学文庫のための計画」を書いて彼に送り、これが「ジャック・ドゥーセ文学文庫」となって実を結ぶきっかけとなったのである。

ドゥーセはその見返りに、パトロンとしてブルトンたちの新しい文学芸術運動も支援するようになる。20 世紀芸術に新しい局面を切り開いたシュルレアリスム運動の陰に、ジャック・ドゥーセという芸術愛好家の存在があったのである。

フランスでは 16 世紀のフランソワ 1 世の時代から、本が出版されると 1 冊は国立図書館に収める献本制度があるが、作品を研究するには、作家の自筆原稿を参照する必要があるがどうしても出て来る。そうした貴重な資料が、篤志家の尽力で蒐集されるというのは誠にうらやましい限りで、日本では、こうした本当の意味でのメセナ活動が盛んになることはないのだろうか。

日本図書館協会の調査によると、日本では公共図書館が図書を購入する資料費が年々減少していて、決算ベースでは 1998 年度には凡そ 362 億円であったが、2008 年度には 307 億円にまで減ったという。さらに職員の数も、2009 年度には凡そ 1 万 2,700 人と 10 年前に比べて 2,800 人も少なくなっている。個人の文化への貢献の前に、年々貧困化する図書館政策を問題にすべきなのであろう。